

English Garden 第55話

"But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,/ And miles to go before I sleep."
Robert Frost

「でも 約束のしごとがある。さあ、行こう、
眠るまでにまだ何マイル、 / 眠るまでにまだ何マイル」
ロバート・フロスト

前回に続きロバート・フロストの詩から、最も有名な次の詩の最後の部分を取りました。

Stopping by Woods on a Snowy Evening

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.



雪の夕べ森のそばにたたずんで

この森は誰のものか わたしにはわかっている。
でも その人の家は村にある。
おそらく彼は見てしまい、わたしがここにたたずんで
雪に埋まった森をあかず眺めているのを。

わたしの馬は げげんなようすだ。
一年じゅうでいちばん暗いこの夕べに
近くに農家のかげも見えない
凍った湖と森のあいだで止まるのが。

馬は鈴をひと振り鳴らし
まちがいではないのと聞いている。
そのほかに聞こえてくるのは
かすかな風に 雪ひらの舞う音ばかり。

森はやさしく 暗くて深い。
でも 約束のしごとがある。さあ、行こう、
眠るまでにまだ何マイル、
眠るまでにまだ何マイル。

広く親しまれているこの詩は、フロスト自身も最も愛した詩の一つといわれています。原詩を音読すると、長母音や二重母音が多く、子音では "w", "l", "m" などやさしい響きを持つ言葉が多用されて、眠りをさそうような穏やかさがあります。雪に埋まった森の中に馬具についた鈴の音がしみとおるような美しい景色に、詩人は思わず見とれて立ち止まりますが、人家もない暗い森の中で、大切な約束を抱えてまだ何マイルも行かなければなりません。最後の連(スタンザ)でこの詩がただのロマンティックな風景描写ではなく、重い現実を背負ったものであることがわかります。

また、専門家のあいだでは、この詩は隠喩(metaphor)に満ちていて、馬での旅は人生に、夕暮れは晩年に、眠りは死にたとえられているという見方が一般的です。さらに、フロスト自身が晩年長女に打ち明けたという次のようなエピソードも伝えられています。
...その年、フロストの農場は経済危機に陥り、彼は冬至の日に農場の収穫物を荷馬車に積んで遠い街まで売りにいったが全く売れず、子どもたちへのプレゼントも買えなかった。帰り道、心は重く手綱を取る気分にもなれなかったが、馬は家路を知っていて、家の近くの曲がり角まで来ると、主人の心を読んだようにゆっくり荷車を止めた。フロストはその場で涙が涸れるまで声を上げて泣いた...

その年は貧しかったが、クリスマスは愛の時であると、フロストはつけ加えています。どうぞ、さまざまな想像を加えて味わってください。

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。